宮本百合子評論選集 4

文化・社会評論

新日本出版社

宮本百合子評論選集

4

文化・社会評論

新日本出版社

宮本百合子評論選集 4

1965年 3 月30 日 再 刊

定価 460円

著 者 宮 本 百 合 子

発行者 松 宮 龍 起

東京都千代田区富士見町 2 の 7

発行所 株式会社 新 日 本 出 版 社

電話東京 (262) 4732番
振替番号 東京 13681番

落丁・乱丁がありましたらお取替えいたします

目次

文化・社會評論

みのりを豊かに……3
明日への新聞……6
人民戰線への一歩……8
モラトリアム質疑……12
逆立ちの公・私……14
石を投ぐるもの……18
青年の生きる道……21
現實の必要——總選擧に際して……27
一票の教訓……31
木の芽だち——地方文化發展の意義……36
公のことと私のこと……40

信義について……43
行爲の價値……46
メーデーぎらひ……48
作家への新風——著作家組合にふれて……49
郵便切手……50
文化生産者としての自覺……53
社會生活の純潔性……58
本當の愛嬌といふこと……60
戰爭でこはされた人間性……61
その檻をひらけ……63
社會と人間の成長……63
共産黨とモラル……72
悔なき青春を——現場錄音No.4，No.5．をよんで……74
平和への荷役……77
それらの國々でも——新しい國際性を求めて……87
便乘の圖繪……94

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

僞りのない文化を……103
新しい潮……111
現代史の蝶つがひ——大統領選擧の感想……116
浦和充子の事件に關して——參議院法務委員會での證人としての發言 124
國　寶……128
ファシズムは生きてゐる……129
平和をわれらに……133
鬼畜の言葉……134
質問へのお答へ……136
「委員會」のうつりかはり……142
肉　親……143
「推理小說」……145
犯　人……147
ボン・ボヤージ——渡米水泳選手におくる……148
日本は誰のものか……150
新しい抵抗について……150

ジャーナリズムの航路……163
アメリカ文化の問題――パール・バックの答に寄せて……166
しやうがない、だらうか？……167
それに僞りがないならば……168
講和問題について……183
地方文化・文學運動にのぞむもの……183
動物愛護デー……184
再武裝するのはなにか――MRAについて……185
いまわれわれのしなければならないこと……187
長壽恥あり……188
平和の希ひは嚴肅である……189
地球はまはる……190
私の信條……192
「チャタレー夫人の戀人」の起訴につよく抗議する……197
若き僚友に……199
新しいアカデミアを……202

指　紋……204
世界は求めてゐる、平和を！……206
修　身……208
「人間關係方面」の成果……210
今日の日本の文化問題……215
序論—三つの段階　Ⅰ—新聞・通信・ラジオ　出版　雜誌書籍　Ⅱ—教育　國字・國語　宗教　科學　Ⅲ—文學　映畫・演劇　音樂　舞踊　美術　スポーツ　文化組織　國際文化組織
解　題……287
解　説……田村　榮……292
宮本百合子年譜……戸臺俊一……297

文化・社會評論

〔一九四五—一九五一〕

みのりを豊かに

やつと、ラジオの全波が聽けるといふことになつた。

そのことが放送されたのは、九月下旬の或夜であつた。田舍の家と、雜音だらけのラジオながら、熱心に九時のニュースをきき、世界の動きが身に傳はる感じであたら、それにつづいて、局からのお知らせを申上げます、と全波聽取のことが告げられた。

日本のラジオが、今日まで國内放送しか聽かれず、全波は禁止されてをり、それを聽くことは犯罪として見られたといふことは、諸外國に例のない野蠻な文化に對する抑壓であつた。しかし、この十數年間の民衆の實生活は全般にわたつて、その細目に及ぶまで餘り切りつまり、自由を失ひ、發言の力がなかつたから、ましてやラジオなどについては、日本のラジオは、かういふものとしてうけ入れてゐたやうに思ふ。もしかしたら、「日本のラジオ」といふ世界文化に對して考へればきまりのわるいその不具性さへ、一般の人々には明瞭に意識されてさへゐなかつたかもしれない。それほど、世界に向つてひらかれてゐるべき私たちの眼、耳、そして知識と心情とは、根本から封鎖されてゐたのである。

その夜、局からの全波聽取のニュースを傳へたアナウンサアの話しぶりは私がこれ迄どんなニュースでもきかなかつたほど、自身の感動に溢れた調子であつた。アナウンサア獨特の、何事を報道しても平靜を失はない、はつきりしてゐるが職業的平板さの伴つた聲ではなかつた。アナウンサアは、全波を禁止してゐたこれまでの軍事的權力がどんなに封建的なものであつたかといふこと、そのために國民は自分達の生活の實狀さへ知らず、更には僞りで組立てた報道で操られて來ざるを得なかつた事實を熱のある表現で說明した。今やうやう全波をきくことが出來るやうになつて、ラジオはラジオとして本來の機能を發揮する時機が來た。あらゆる聽取者よ、全波受信の設備をせよ。そして、日夜廣々とした全世界の脈動に貫かれて生活を向上させ、新しい日本の創設のために努力するやうにと、そのアナウンサアの表現は、率直で殆ど激情的でさへあつた。いかにも、明暮れその仕事に携つてゐる人が、專門家として蒙つてゐた云ふに云へない永年の不自由から、自由になつた！これからこそと意氣ごんだ氣組みとよろこばしい激勵とに滿ちてゐた。日本獨特のダラダララジオから、かういふ聲が響き、外ならぬアナウンサアが、かういふ人間的感動をもつて、彼等も一專門家として享受するやうになつた解放の息吹きに胸を高鳴らしてゐるといふ事實は、深くわたしの心を動かしたのであつた。そして、われわれ日本人は、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

今日、他の文明國の人々たちがほとんど想像もし得ないほど些細な日常事象の一つ一つについて、可能となつた積極性、或は合理性をよろこんでゐるのであると痛感したのであつた。

床についてからも、新鮮な勢ひで生活に導き入れられたオール・ウェイヴス、全波についてあれこれと考へてゐるうちに、いろいろのことが思ひ出されて來た。

ラジオ屋と警官とが一組づつとなつて、東京各區をめぐり、ひとの家に急に入つて來て短波受信機の設備の有無を調べ、もしあればそれを沒收したり處罰したりしたのは、いつのことであつたらう。二年ほど前の初夏の頃であつたと覺えてゐる。

沒收した優秀な機械は、遞信省や大藏省の役人が家へもつて歸つて据ゑつけたといふやうな巷間の噂をきいたのも、それにつづく頃ではなかつたらうか。

短波を禁止してゐた日本當局は、誰かが優良品を輸入するとすぐ、短波受信に必要な機械の部分品をすつかりそれから剝ぎとつて來た。一寸のことではもう短波の聽けないやうに破壞したのち、使用をゆるした。

いよいよ、明日からでも全波が聽けると告げられたとき、さうして不具にされた設備をもつてゐる人々は、どんなに殘念に思つたことだらう。そしてまた、そこに出入りし、同じ隣組に屬す何倍かの人々は、心からその殘念をわかち合ずにゐられなかつたと思ふ。

全波機は、二百圓より五百圓迄で製作販賣されると云はれたけれども、わたしが相談するどの專門家も、それで出來るとは保證してくれない。だいたい十倍の價格がいはれる。その上、日本の今日の技術では、全波に切り替へて行くスウヰッチの製作が未熟であつて、とても自由に地球をめぐる電波は捕へかねるらしい。固定させて、それぞれ、聽取目的の波長にやや合せて、いくつかをきめて切りかへて行くスウヰッチならば、相當の性能をもつといふことである。その他、絕緣體の質の問題とかもあるときいた。

一言にして云へば、全波が聽けるといふ聲、聽きたいといふ欲望は日本中に普くあるのだが、實際聽ける機械は、さしあたりどこに在るのかわからない狀態が生じてゐるのである。

日本の人々の生活にとつて、この一二年の間にラジオの位置は、徹底的に變化した。空襲以來、すべての人は、ラジオが生活の必需品であり、それは米と一緒に守らなければならないものとして理解するやうになつた。一つは、報道が人々の生命の安全に直接關係したからであるし、他面では、機械がなくて、一度失つたらもう手に入り難いといふ事情に立つてゐる。部屋を照す電球が買へないのと等しく、ラジオのための眞空管は、普通人には買へないものの一つとなつてゐる。

ラジオは文化の享受面に立つものであるけれども、今日では誰の目にもそれが直接日本の生產技術の低さと繫つた

不自由に縛られてゐることが明らかとなつて來た。何故それほど生産技術が低いのだらうか。そしてまた何故、これほど必需品生産は、企業家たちによつて怠業の狀態におかれてゐるのだらうか。疑問は、ラジオ一つを通じてさへ今日の生産活動の澁滯の本質を知りたい願ひとなつて來るのである。

今年は、九月下旬から十月初旬にかけて日本西部が深刻な風水害をうけた。山陽本線は一ヶ月も故障したのであつた。義弟が原子爆彈の犧牲となつたため田舍へ歸つたが、急な歸京が必要となつて、呉線の須波—三原の間、姫路の二つ三つ先の驛から明石まで、徒歩連絡した。須波と三原との間は雨の降りしきる破壞された夜道を、重い荷を背負つた男女から子供までが濡れ鼠となつて歩いた。

姫路は、あの邊の重要都市の一つであり、空爆をうけて燒かれてゐる。バラックの驛長事務所で、小雨に打たれて列に立ちながら、連絡について、いくらかでも具體的なことを知りたいと思つたら、若い驛員は、最後に「どこともの電話が通じないんだから分らんよ」と答へた。それは、答へといふよりも、寧ろ、これでもまだ訊くか、と居直つたやうな語氣で云はれたのであつた。

どうやら歸京して、上野驛で人を待つ用事が起つた。待つ列車は青森發東北本線の上りで、夜の九時すぎにつく豫定であつた。

大混雜をぬけて出口に立ちつくしたが、その前の信越線、八時二十分からがいつ迄經つても入つて來ない。改札係の板の上には、時間表があり、定刻と、おくれて到着した各列車の時刻とが對比して書き込まれてゐる。けれども、驛員たちは、柵の外に困却して佇んでゐるわたしたち同樣、その列車がそこに出現する迄は、どこで、どんな理由で、何分おくれてゐるのかといふことに就ては全然知つてゐなかつた。待つてゐる人々と彼等との違ひは、ただ彼等はちつともそれについて心配してゐないことと、呑氣に立つて喋舌つてゐて、相當頻繁にこそこそと入場券購入許可證とゴム印を捺した紙片をもつて來る人を、出口から乘車フォームへ通してやつてゐることだけである。

姫路その他の驛でも感じてゐた運輸事務能力の低さ、無智な不親切さが、このときも身に沁みた。

思へば愕くべきことだが、日本の鐵道省は、各驛間の無電連絡を一つも持つてゐないのではなからうか。

事務室で、チリチリとベルが鳴り、係員がハアハア、ハアハア、と一種の玄人らしさで返事してゐる、あのデンワで、この多忙、繁雜、非能率な國鐵運營の難事業を處理してゐるのではないだらうか。

各種の軍事施設は、おそらく優秀なラジオをもつてゐたらうと思はれる。憲兵隊のやうなところも、同樣であつたに違ひない。そこにあつたラジオの設備を、せめて運輸事務の改善のために活用することは出來ないものなのだらう

か。そして、食糧の輸送に一つの强味を加へることは出來ないものだらうか。

各地の警察連絡にはラジオが利用されるが、鐵道にはそれが利用しようともされてゐないといふのが、今日でも、日本の現狀であるのだらうか。

わたしは全波のラジオが早く聽きたい。破産しても支拂へないほどの金を拂はないでも聽けるやうに日本の生産技術が進んで欲しいと思ふ。

ラジオただ一つをとつてさへ、わたしたちの今日の生活における樣々な可能性と、それを實現する手段との間には、これだけ巨大な開きが存在してゐる。可能性が、單に可能性として止つてゐるなら、やがてそれは可能性でさへなくなつてしまふ。何故なら、可能性といふのは、それの實現に努力獻身し、その結實を確保する、といふ條件があつて、はじめて人間生活の貴重な現實的モメントとなつて來るからである。わたし達は、自分達が眞に勤勉であり、進歩の實現に對して眞實の努力を傾けつつあるか、といふことについては、鋭い自省をもたなければならないと思ふ。可能性があるとき、それを實質のある現實のものとする努力を怠れば、それはもう私たち各自が、自分を責めなければならない懈怠と云はれるべきなのである。（一九四五・一一・八）

〔「人民評論」一九四六・一〕

明日への新聞

一

新聞といふものについての考へかたも、それぞれの時代によつて大きい變化を經て來てゐると思ふ。

明治の開化期、日本にはじめて新聞が發刊された時分、それはどんなに新鮮な空氣をあたりに息吹かせながら、封建と開化とが奇妙にいりまじつて錯雜した當時の輿論を指導したことだつたらう。論說を書いた人々は社會の木鐸であるといふその時分愛好された表現そのままの責任と同時に矜持もあつたことだと思ふ。或人は熱心に、新しい日本の黎明を眞に自由な、民權の伸張された姿に發見させようと腐心し、封建的な藩閥官僚政府に向つて、常に思想の一牙城たらうとした。

元來、新聞發行そのものが、民意反映の機關として、またその民意を進歩の方向に導くための理想をもつて始められた「文明國」らしい仕事であつた。

資本も、そんなに大きいものではなかつただらう。記者として働く一人一人が、當時新しく强く意識された人格の

獨立を自身の内に感じ、自分が社に負うてゐるよりも、自分が正にその社を擔つてゐる氣風があつた。しかし、ここで注目すべきことは、日本では、明治開化期が、二十二年憲法發布とともに却つて逆轉させられて、人民の自由の封鎖がはつきりその頃からはじまつた點である。それまでは潤達であつた婦人の政治的活躍も樣々の法令や規則で禁止されるやうになつたし、所謂筆禍によつて投獄される新聞人はこの前後に目立つて多數になつて行つた。日本の開化期の文化に關係ある統計のあるものは極めて意味深く近代日本といふものの本質を示してゐると思ふ。犯罪統計のうち破廉恥罪以外で投獄された人民の第一位を新聞取締法違反によつて告發された執筆者たちが占めてゐたのである。

二

日本の新聞の歷史は、かうして忽ち、反動的な强權との衝突の歷史となつたのであるが、大正前後、第一次歐洲大戰によつて日本の經濟の各面が膨脹したにつれて、いくつかの大新聞は純然たる一大企業として、經營されるやうになつて來た。利潤を追ひ求める企業としてのあらゆる性格と方法とを備へて來て、どつさりの金を出す廣告は氣狂ひじみた權利を紙面に主張するやうになつた。各新聞の古風な商賣仇的競爭も、商品としての新聞の賣行きのために激しく鼓舞され、記者たち一人一人の地位は、木鐸としての誇りある執筆者の立場から、大企業のサラリーマンに移つて行つた。記者その人々の存在は、社名入りの名刺とその旗を立てて走る自動車の威嚴によつて裝はれるやうになつたのであつた。

最近十數年の間、戰爭を强行し、非常な迅さで崩壞の途を辿つた今日までの日本で、新聞がどういふものであつたかは、改めて云ふ必要さへもない。わたし達は本來の意味では新聞といふものを持たずに、何年かを過させられたのであつた。

ところで面白いのは、最近何年間かのこの輿論封殺時代に、新聞人は、却つてその前時代の散漫であつた人々よりも遙かに內面的になり、批判的になり、且つ客觀的な科學性をもつて社會事象に向ふやうになつたことである。新聞關係の人々は、各方面を廣汎に、戰時中の社會生活の現實を目擊し、理性ある人間であるからには、それを批評せずにはゐられなかつた。しかし、その聲は完く封じられてゐた。

今日、かういふ過程を經た新聞人の進步的な要素が、わたしたち人民の、ひろく强く生き進まうとする熱意と本當に自然な一致をもつて結び合されつつあるのは、實に意義深いことだと思ふ。言論が客觀的な眞理に立つ可能とその必然をますと共に、人民の生活意識が、人間らしい欲求の自覺とその行動に進むにつれ、新聞はおのづから一轉換を誘はれて、再び、金儲け事業としてではない新聞の內容と組織とにならうとしてゐる。樣々の形で、さういふ動きが

ある。

これは、うれしく愉快なことだと思ふ。サラリーマンから再び人民の聲を反映し、同時に木鐸たる記者に、自身の本質をとり戻すジャーナリストたちの新しい希望とそれに對する幾千萬の人々の期待は、互ひに苦しい時代を經てゐるだけに、決して表面の交歡ではないと信じてゐる。

〔「民報」一九四五・一二・一、二〕

人民戰線への一歩

うちを出て、もよりの省線の驛までゆく途中の燒跡にもこの頃はいろいろの露店が出はじめた。葭簀ばりの屋臺もいくつかある。

きのふ、霜どけのぬかるみを歩いてその通りをゆくと、ちやうど八百屋が露店を出してゐた。人蔘、葱、大根が並んでゐる。鉢卷した賣りてが、大きい一本の大根をぶら下げて、あつちからこつちへと積みかへながら、

「さァ、この大根だと、一本十六圓」

さう呼んでゐる。何人かの男女が、八百屋の前に佇んでゐた。が、誰も彼も默然として野菜を見下し、その聲をきいてゐるのであつた。

少し行くと、魚屋が出てゐる。この邊に、こんなどつさり品數を並べた魚屋は、珍しい。好奇心に誘はれて、人垣の間から首をのぞけてみたらば、鮪百匁五十五圓と書いた札が先づ目についた。そこでも、たかつてゐる人のどつさりの中で、實際そのとき買つてゐるといふ女も男も見當らなかつた。やつぱり、口かず少なく、百匁五十五圓のマグロ、一山十五圓のカキの皿を眺めおろしてゐるのであつた。

そこここに、かうして市場まがひのものが出はじめた。そして、街頭は、人出が繁いのであるが、さて、今日地道な生活の人々はもう値段かまはぬ買物をして暮す氣分ではなくなつた。戰時利得稅をいづれ拂はなくてはならず、しかも、大財閥に對してのやうに、政府が樣々の法式を考案して、とり上げた金をまた元に戻してよこしてくれる當もない。戰時成金ばかりが、昨今、使つてしまへといふ性質の金錢をちらしてゐるのである。

つい先頃、一月十日までの供出米は、豫定の二割ばかりしかないといふ報道があつた。殆ど時を同じくして、農林大臣は、米の專賣案を語り、農林省の下級官吏たちは大會をもつて、食糧の人民管理を主張した。この對照は、新聞をよんだすべての人々に、深い關心をよびさましたと思ふ。農林省につとめてゐれば、食糧關係のあらゆる行政の網がわかつてゐたのは當然であらう。その道の專門家が揃つて、人民管理をよしとするからには、疑ひもなく農會、

營團、その他の機構に、滿足されないなにかが存在してゐるからである。どんな長閑なこころも、日本の現實の中で「横流し」といふ術語を知らないものはなくなつてゐるのである。

新聞などを見ても、食糧の人民管理への關心は高まつて來てゐて、一般の方向は、そちらに傾いてゐるやうに見える。つい、二三日前、この氣勢に一つの刺戟を與へるやうな實例があつた。東京板橋の區民が、食糧管理委員會を組織し、板橋の造兵廠内に隱匿されてあつた食糧を發見、それを區民に特別分配した。新聞は、群集した區民に向つて、氣前よく米、麥、大豆、乾パン類を分配してゐる光景のスナップを掲載した。

それはこの一月二十一日ごろのことであつたと思ふが、二十四日の新聞には、農林省で、米の強制供出案をもつてゐることと、警視廳が「板橋事件」を重視してゐるといふことと、一層強くなつてゐる食糧人民管理の潮先とが、並んで一枚の紙面を埋めてゐるのである。宮城地方では、農民が「隱匿油罐を踏み臺」にして政府の主食糧強制買上に反對の氣勢を上げた。農民の分厚い肩が重なつて話をきいてゐる寫眞がのつてゐる。

昨今の日本では、數日のうちに、事態がどしどしと推移してゆく。私たちもそれに馴れて來てゐる。しかし、この板橋での出來ごとや強制買上案、警視廳の意見の公表の調子などの間には、私たち人民が、ふむ、こんな風か、と讀みすごしてはならない、極めて微妙、深刻な、何かの底流が潜んでゐるのではなからうか。

私たち日本の人民は、やつとこのごろ、自分たち人民としての自信と主動性とを理解して來たやうな段階にある。漸く、永年強ひられて來た欺瞞に盲從する習慣から脱して、少しづつ、人民の生存は人民の知慧、判斷、行動で守り、平和と安定を日常にもたらさうとして動きはじめたところである。經濟、政治、文化の全面にわたつて人民としての要求を貫徹し、日本の民主化を徹底させるための人民戰線、民主戰線といふことが、私たちの現實的で發展性ある方法として、身近いものとなりつつある。人民は、自分の全生活について自分たちで判斷・配慮し、分別してゆくことが、とりも直さず民主の政治の實體であることを學びつつあるのである。

この頃の毎日は、さういふ意味で、日本の私たちにとつて全く歴史的な日々となつて來た。それだからこそ一日一日のうちに起るいくつもの事象について、私たちは極めて注意ぶかくなくてはならない。聰明に現實的に、自分たちの新しき構想の完成に努力しなければならないのである。

かういふ心もちからいふと、どうしても、私たちは「板橋事件」強制供出その他一つらなりの食糧問題解決への場面で起つた現象をももうすこし細かに觀察し、學ぶべきことがあると感じる。

第一、農林省は現に自分の懷の中に、官吏たちの團體行

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com